The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ドバリー著『朱子学と自由の伝統』の翻訳を通じて |
| Author(s) | 山口, 久和 |
| Citation | 中国研究集刊. 1988, 6, p. 36-42 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/61062 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# ドバリー著『朱子学と自由の伝統』の翻訳を通じて

山口久和

（一）

縁あって、アメリカの高名なシノロジスト、コロンビア大学教授ウィリアム・セオドア・ドバリー氏（Wm. Theodore de Bary）の *Liberal Tradition in China* を平凡社より翻訳出版したが、新聞の書評などから察するところ、本書がたんに中国思想史プロパーの問題としてよりも、東アジアの近代化に果たした儒教の役割という、遙かに広い関心の下で読まれているらしいとのこと。もとよりこれは原著者を始め訳者や書肆の期待するところであったが、実証主義云々のレベルだけから鼎の軽重を問われはしまいかと、内心は穏やかではなかった。というのも、ドバリー氏の問題構制（プロブレマティク）と論述のスタイルが、清朝の考証学の伝統を継承する日本のシノロジーの文献実証主義的精神に到底なじめるとは思えなかったからである。それゆえ「訳者解説」などと僭越な一文を草して、彼我のシノロジーのギャップをできるだけ埋める努力をしたが、この不安はいまだもって杞憂として解消するには至っていなかった。

ところが幸い、本書を読まれた加地伸行教授から、西欧人の書いた中国研究書を翻訳する意義や問題点について書いてみないかというお誘いを受けた。渡りに船である。早速、横文字を立文字に変換している際に頭に浮かんだ妄想の如きものを、多少論理の衣をまとわせて書き連ねてみた。論じたい事項は、次ぎの三点につきる。翻訳行為、実証主義批判、パロキアリズム(1)（parochialism）の評価。むろん一般論としてではなく、あくまでドバリー氏の著書に即しての議論である。ではあるが、ここに思想史研究というものの核心に触れる問題点を予想した上での話しである。以下、著者に忠実な訳者としての職分を踏み越えたところで論を進める。したがってその立論には、著者ドバリー氏は責任がないことは言うまでもない。

（二）

まず具体的で論じ易い翻訳の問題から始める。ここでの議論は、西欧人の手に成る研究書を翻訳することの意味、及び彼ら

の研究書に付された引用原文の自国への訳出の評価ということである。後者は、日本の研究者の論述スタイルである原文の訓読と、西欧の研究者が行っている原文の近代西欧語訳の優劣と言いかえてもよい。まったく無関係のようでいて、実はこの二つは同根の問題として論じることができる。

長い伝統と優秀な研究者を擁する日本のシノロジーに、なぜわざわざ西欧人の研究書を訳出紹介する必要が有るのかという素朴で多少偏見に満ちた疑問に対しては、本書が極めて優れた内容を持っているからだ、とだけ答えておこう。ここで論じたいのはそのようなレベルの話しではない。中国人の研究書も含めて、一般に外国人の研究成果を翻訳することのメリットを、私は「異化」[2]（alienation）という言葉で説明したい。簡単に言えば、異なった文化的背景（その最も顕著なものは言語である）を担った彼ら外国の研究者には当然、我々と異なった意味分節、つまり意味を掴み取るための網目を持っている。したがって、これまで我々の興味を引かなかった同じ対象が、彼らの言述を通して異なった様相で提示され、その結果、こちらの知覚が刺激され、ひいては知識の修正が行われることになる。

ドバリー氏の著書から一例を挙げてみることにしよう。著者は、新儒学の伝統の中で「敬」という観念には、生のあらゆる側面に畏敬の念を向ける宗教的態度・精神が認められるという面白い、そしてまた新儒学の本質規定にとって極めて重要な指摘をされている（本書一〇九頁）。「敬」の中に、このような意味の存在を知覚することは、この語をほぼ日常語として使い慣れている我々には至難の技である。ところで著者は「敬」に“reverence”という訳語を与えている。（標準的な中英辞典は、“respect;esteem”を挙げるのがふつうである。）いま手近の語源辞典を引いて見ると、“reverence”の古期フランス語さらにはラテン語の祖語が、“to fear,feel awe”を意味したことが分かる。[3] そしてその意味は今もこの語の中に残存している。つまり“reverence”という英語は、かなり正確に新儒学の「敬」と対応するのである。その対応の核心は、非日常的なものに対する畏怖の感情であり、それはドイツの宗教学者ルドルフ・オットーが宗教現象の本質を成すものとして抽出した概念である。[4] つまり、日本語の網目から漏れ出る、新儒学の「敬」が持つ微妙な意味合いが、英語の“reverence”という語によって掬い上げられたということである。いや、それは逆である。ドバリー氏が「敬」の中に宗教的意味を認めたからこそ、“respect”や“esteem”ではなく“reverence”を訳語として与えたのだ、という反論も一応は成り立つが、これは言語の分節化作用の本質を弁えない議論と言うべきである。例えば、緑色という言葉を持たない言語を使用する人々には、緑色を知覚できないという意味論上あるいは人類学上の真理を想起していただきたい。英語の“reverence”の意味分節が、新儒学の「敬」に正確に対応したからこそ、著者はそこに宗教的意味を知覚できたのである。その逆では決してない。ちなみにこの意味分節作用は、ラング

としての言語の性質上、個々の言語使用者には一種の強制として働くものである以上、ドバリー氏がこれを意識して行ったかどうかを問うことは不要であろう。

さて、我々の意識の網の目では捉えられない意味や事実を開示して、我々の知覚・認識を刺激する、すなわち「異化」する手段として、外国人の手に成る研究書を翻訳紹介する、いやしなければならない理由が理解できれば、いま一つの翻訳論上の問題の意味がすっきりする。要するにここでの論点は、「異化」の手段として、引用原文の訓読が適当か、自国語（むろん現代日本語もその中に含まれる）への翻訳が適当か、である。それを論じるには一体、原文の意味とは何か、その解釈とはどのような行為なのかについての確認が必要であろう。

そもそも一篇の論文の論述において、書き手である我々に要求されているのは、論述というコンテキストにおける原文の意味の確定、多義的な意味のその場限りでの固定化である。求められているのは、例えば「理」ではなくして、それが法則（Sein）を意味するのか、規範（Sollen）を意味するのか、その選択であり確定である。もっとも厳密に見れば、こうした訳語の選択・確定は、じつは引用原文そのもののコンテキストと、論述のコンテキスト（つまり論者の意図あるいは意味志向）との両コンテキストがせめぎ合うところにかろうじて生じる、いわばその場限りでの意味を掬い上げる行為なのである。この事実の意味するところは二重である。すなわち、引用原文のコンテキストの側から制約を受けている点で、訳語の確定は客観性を志向するが、いっぽう論者の関心に支えられた論述のコンテキストは、客観性の枠内で精一杯主観的――恣意的とは違う――意味を志向する。言いかえれば、客観的ではあるがいまだ潜在的意味（引用原文）にすぎないものを顕在化するわけであるが、その顕在化の過程そのものは主観的であるということである。意味（meaning）は一義的（つまり客観的）であっても、その意義（singnificance）は解釈者に応じて変化すると言ってもよい。[5] しかも意味そのものは、カントの物自体に似て、それ自体なにも語らず、ただ意義の枠組みとしてのみ存在する。ということは、論述中のむきだしの原文はなにも告げてはいないということであり、それをしてより明瞭に語らしめるのが解釈ということであり、解釈行為（翻訳と言いかえてもよい）は原文の意味の許容範囲内で出来る限り主体的に意義を顕在化させることである。つまり解釈は多義性を排除して一義的意味――しかしそれは主観性を帯びている――を志向するのである。

論述において必要とされるものは、原文の明瞭で一義的な意味の確定であることが理解されれば、古代中国語の語彙を不完全な日本語のシンタックスに載せた訓読文体は、意味の確定という点だけでも、現代語の訳文には及ばないことがわかる。が、ここでの論点はこのような常識の確認のもう一歩奥にある。さきほどから論じているように、一義的な意味の確定は、他の可能な意味を解釈者が主体的に排除した結果成り立つものであり、

そもそもこの主体的関心に支えられずして解釈行為はありえないという点で、濃厚に主観性をおびている。だがしかしその主観性は、意味（meaning）の許容範囲を逸脱していないという点で、けっして恣意性とは同じでない。いま恣意的でないということを前提にした上で、解釈の主観性を問題にした時、例えば、「理」や「気」のように多義的な概念であればあるほど、解釈（翻訳）による意味の固定化は、生の原文（多義性に富んでいる）を通しての理解――おぼろげな意味の予感と言うべきかもしれない――に違和感を与えるはずである。おそらく解釈者が主観的（恣意的ではない）に選び取った意味と、そこから排除された意味とのコントラストがもたらすこの違和感こそが、理解の深化を促進するものであろう。試みに、「理」を形相と訳す場合を考えて見よ。当然、その訳語の違和感は、アリストテレスの形相の概念とのズレに意識を及ぼすであろう。まさしく「異化」が起こっているのである。これが原語と訳語とが意味上一対一に対応し、解釈者の主観的契機が入り込む余地のない場合、“dog”に「犬」なる訳語を与える場合など、「異化」は起こり得ず、したがって理解の深化もない。しかも一方、こうした「異化」の現象は、“dog”に対して「一種の動物」とか「犬」とかではなくして、「ポチ」や「タロ」と断定する、ドバリー氏の例で言えば、「道統」を、その意味の豊穣性を敢えて犠牲にしても、論述のコンテキストに従って“repossessing the Way”と明確に訳す勇気を必要としているのである。

以上が、引用原文を訓読ではなくして一義明瞭に翻訳すべき理由であると同時に、ドバリー氏の引用原文を英語からわざわざ重訳したことの私自身の弁明でもある。

（三）

つぎにパロキアリズムの評価と関連して、実証主義的方法の限界と批判を見ることにするが、本書にこのような側面を読み取るのは、筆者の臆断によるものとはいえ、著者のパロキアリズムの肯定的評価は、それを方法論的に推し進める限り、実証主義の批判にまで展開しなければならない性質のものである。

事柄が余りにも大きいだけに、具体的なところから論を進めよう。著者ドバリー氏は本書の意図を説明して、「ところで宋代における儒学の発展の中には、伝統的な儒教の価値を援用し、それを近代的（modern）、自由的（liberal）な方向に発展させているものがある。これが私が以下論じようとしている問題である…」（五七頁）と述べている。実際、著者が本書で遂行したのは、近世儒学思想の中に、この「近代的」「自由的」諸特性をトレースすることであったわけであるが、書評者の一人が嚙みついたのは、西欧の歴史的価値を濃厚に帯びた「近代的」あるいは「自由的」なる観念でもって、中国近世の儒学思想を記述することは、実は西欧の歴史がその近代性に向かって辿ったのと同じ進歩の道筋を、中国の歴史の中に意図的に読み込む行為となる、という点にあった。さらに同じ評者は、これらの

観念に対するさまざまな定義の中から、自分自身のあらかじめの了解と矛盾しないもの（つまりは自己の論述に有効な定義）を著者は主観的に選び取っている、とその概念適用の非客観性を批判したのである。

この二様の批判は、つまるところ著者が主観性を排除することに成功していないという点に帰す。ところで「主観性」をマイナスの契機と見る評者の立場は、厳密に定義された概念を合理的に運用することによって客観的な知識に到達できると主張する実証主義に属するものと見なしてよい。そして実証主義の本質は、認識主体（研究者）は認識対象に対して超然たる存在であり、ただ対象へ一方的に働きかけるものであるという暗黙の前提の中にある。確かに、概念の合理的運用という点に関して、実証主義に反対すべき積極的理由はない。しかし、そもそも彼らの主張する客観的認識がいかなる関心によって導かれているのかということ、言い替えれば、研究の動機づけ（motivation）が何であるかを問題にする時、実証主義はその客観主義の枠内に留まろうとする限り、満足な解答を与えることはできない。すなわち認識の客観性は、その認識を支える主体の立場の客観性を論理的に保証するものではない。実証主義の客観性は例えてみれば、ゲームのルールに似ている。ゲーム内では厳密にルールが遵守されねばならない。しかし数多くのゲームの中からどれを楽しむかは、選択という純然たる主観的行為の結果なのである。ゲームのルールの厳密さは、そのゲームを選び取った人の行為の客観性・合理性をなんら保証してくれはしない。これは原理的に出来ない相談なのである。

評者が著者ドバリー氏を、西欧中心のパロキアリズムから依然脱却し得ていない、すなわち主観性を排除することに成功していないと批判するのは、この種の不可能な要求をしているのである。評者とて自己矛盾を犯すことなしに、決してこの要求を満足できはしない。そもそも認識を導く関心というものに合理的、客観的（ということはアプリオリな）説明を与えることは原理的に不可能なことなのである。要するに、主観性は排除され得ないものなのである。そしてその除去が原理的に不可能事であるならば、むしろ主観性の契機は、認識過程の中で積極的に評価されねばならないであろう。ゲームを選び取ることなしに、ゲームを行うことはできないのと同様、厳密な認識活動とて、対象についての事前の了解を、すなわち主観性を前提にしているのである。いやしなければ、対象を措定することさえできないであろう。考えてみれば、西欧の近代性（modernity）という地盤の上に立っているという主観的事実こそが、中国近世思想史の展開の中に自分の属する世界と同質の何物かを発見しようとする著者の学問的関心を喚起したわけである。それを、この学問的関心あるいは動機づけを主観的と批判し、西欧のリベラリズムと同じものが中国という異質の文化的伝統の中にも認められるということ、つまりはリベラリズムの普遍性を事前の了解事項として論を進める著者の方法を非客観的として非難

するのは、全く不毛の議論というべきであろう（思想史研究においてこの種の客観主義の神話が横行する様には驚くべきものがある。）もし西欧中心のパロキアリズムを克服しようとするならば、世界主義的対地域主義（cosmopolitan/parochial）という二分法をも乗り越え、むしろ主体的・積極的にパロキアリズムを選びとらねばならないというドバリー氏の主張は、客観主義の不毛性と、認識を支える主観的関心の価値をよく見通した妥当な発言と言うべきものであろう。

ここでもう一度、先ほど私が「主観的」という言葉に込めた意味を思い出していただきたい。決して「恣意的」とは同義ではない。主観性は、客観的認識を生み出しそれを真理に導くものであっても、客観性と対立するものではない。というのは、事前の了解あるいは論点の先取りは、それがそのまま結論となることはない（もし恣意性が指摘されるならば、これこそそうである。）事柄の理解が深まるに従い、そのような認識を導いた最初の了解が修正され、再度、新たな了解に基づいて認識が行われ、いわばこの過程が無限に繰り返されるのが、理解ということの本質なのである。我々フィロロジストが日頃行っている認識行為を多少自覚的に反省してみれば、これが奇異な主張ではないことが理解されるであろう。客観的法則から一義的に真なる事実を導出する演繹法、あるいは全く中性無記な事実の集積から客観的法則を推定する帰納的論理などは、事後的に自己の論証を合理化するための飾りにすぎない。むしろ新たな認識が創造される場は、「先取り」と「修正」とが無限に循環する極めて不透明な過程なのである。著者ドバリー氏の再三にわたるリベラリズムの定義の修正、また修正されたこの概念を用いての歴史的事実の再解釈は、評者が指摘するようなルーズな概念操作ではなく、研究対象の事柄事態が要求する必然の過程なのである。そしてこの過程においては、実証主義が夢想するように、認識主体は認識対象に対してもはや透明な超越的立場を取ることは許されないのである。

したがって、事前了解の主観性を指摘するのはなんら手柄になる話しではない。真に価値ある議論は、認識を導いている主観的関心がはたして何であるのかということの理解に始まる。それは、当の関心が対象に内在的であるのか、それとも単に実践的に動機づけられたものであるのかによって、その結果の認識を主観的あるいは客観的と判定することではない。西欧の個人主義の限界を克服できるような自由主義的思想を、過去の中国の伝統の中に探ろうとする著者の主体的関心は、実践的に動機づけられたものであると同時に、中国という対象についての客観的認識をもたらしている。少なくとも、私はそう理解する。そしてもし、著者の見解に異議を唱えようとする者は、自分の立論も同様に主観的関心に支えられたものであることを認めることから実り多い議論が生まれることを知らねばならない。これが学問的誠実というものであろう。

要するに私の主張は、書かれた言葉という、それ自身黙して

語らぬものを相手とするフィロロジーの世界においては、唯一妥当な意義の確定は夢想にすぎず、したがって様々に事なる解釈や評価の並存は極めて健全な学問的状況であるということである。しかしこれは、糸の切れた凧のように勝手な方向に解釈を行い、評価を下してよいという主張とは断じて同じではない。これでは恣意性を許容し、脱けがたい相対主義のアポリアにはまり込んでしまうであろう。ところがそうならないのは、すでに述べたように、確定されるべき意義（significance）は意味（meaning）の制約を受けているということ、また主観的関心に導かれた認識はそのつど、対象から修正を施されるということ、この二つの枠組が作用するからである。そしてこの枠組の中で生みだされる解釈・評価は、相互に主観的であっても、決して恣意性の刻印を帯びることはない。もはや我々は、これら解釈の並存を前にして、いずれが真か偽かと問うことは無意味であろう。ただ前提となる主観的関心、あるいは認識への動機づけを理解し、その理解という行為それ自体がまた思想史の一コマを形成するものとなることの、真剣な認識が必要ではあるまいか。

以上、ドバリー氏の著書に藉口して、私自身の方法論をマニフェストすることになってしまったが、まだ述べたいことは山ほどある。後日、紙面が許されるならば、贅言ならざる正論を書き連ねてみたく思う。

〔注〕

(1) 地域主義的偏見とでも訳すべきであろうが、ドバリー氏はこの言葉に積極的な価値を与えて使用している。つまりこの語の辞書的・慣用的用法とは異なるので、混乱を避けて、パロキアリズムと記しておく。

(2) 「異化」とはロシア・フォルマリストに由来する文学理論の用語で、要するに、見慣れた対象を見慣れない未知のものとして提示することによって、知覚を活性化する技法のことである。

(3) 例えば、Walter W.Skeat, *A Concise Etymological Dictionary*, p.447 "Revere"の項を見よ。

(4) ルドルフ・オットー『聖なるもの』（岩波文庫）。

(5) 意味（meaning）とは、テクストに表されているものであり、作者の意図である。これに対し意義（significance）は、この意味とそれを解釈する人との間に成り立つ関係を示している。意味は不変であるが、その意義は変化する。方法論的に、この二つのいわゆる意味を区別しないところに、フィロロジーの世界に自然科学的客観主義を要求するという誤りが生まれることになる。